

「安全保障は平和を構築しない」

2015. 09. 05

権力者が反対する者を殺害することはいつの時代でも見られる惨劇である。ドイツの神学者・牧師ディートリッヒ・ボンヘッファーは、20世紀中葉を「神の前で、神と共に、神なしにわれわれは生きる」時代と認識し、ヒトラーの暗殺を目論んだ。計画は発覚し、終戦直前に絞首刑で落命した。ボンヘッファーの思索は戦後の神学界に大きな影響を与えた。彼は「安全保障という道によっては、決して平和に到達できない」と書き残している。当時、日独伊の三国同盟が結ばれていた。そして、三国は軍事力で他国を占領、支配する暴挙に走った。結末は、連合軍によって無残な敗戦を迎えた。ボンヘッファーは安全保障が持つ危険性を受け止めていたのであろう。「安全保障という道によっては、決して平和に到達できない」という言葉聞き直し、安全保障の楔から抜け出る時ではないか。

安全保障はある国々を結ぶ軍事同盟である。軍事同盟は仮想敵国を想定して成り立っている。両者の間には緊張があり、抑止力が働く間は戦争を回避できるが、崩れると戦争になる。これからの戦争は勝者も敗者もない、人的被害、自然破壊、無益な消耗だけである。

日本は国際社会に復帰する「講和条約」を交わした時、自由と民主主義を標榜する米国と安全保障条約を結んだ。ソ連を中心とした共産主義国家との対立が生んだものである。この条約によって、戦後70年の平和を維持してきた。日本は憲法九条を堅持し、専守防衛の立場を貫き、他国との戦争に巻き込まれないできた。核を「持たない、作らない、持ち込ませない」の三原則、武器輸出の禁止など、平和国家を目指してきた。この英知と努力は高く評価できる。国際社会からも認知されてきた。

ところが、安倍政権は国際的な安全保障環境が緊迫してきたことを理由にして、米国の軍隊と共に戦うために集団的自衛権の行使が必要であると「安保関連法案」の法制化を強行している。国益を求め、戦争と紛争を起し続けてきた米国に世界の各国は距離を置きはじめています中、日本だけが米国追従を深めている。国際的に孤立していく道ではないか。

中国、韓国、北朝鮮（民主主義人民共和国）はアジア・太平洋戦争において、日本が甚大な被害を与えてきた国々である。謝罪を込めて、アジアに平和的共存関係を築くことが日本の使命である。イスラム圏諸国は、石油で利益を分け合っている国以外、欧米からの蹂躪、支配に強い反感と深い怒りを持っている。イスラム諸国との良好な関係を持っている日本は、欧米との橋渡しをする機会を作ることができる。米軍に従属した戦闘行為を起こせば、これらの国々との関係を悪化させ、無意味な敵対関係を増幅させるだけである。

安倍政権は国民の安全と平和を名目にして、米国との安全保障を強化し、軍事力に頼って立つ「積極的平和主義」を声高に説いている。「積極的平和」とは構造的な差別や貧困をなくしたところで構築する平和である。安倍政権は真逆な「力」を背景にした平和を主張し、防衛費も上がり続けている。力の誇示は弱肉強食の獣であることの宣言である。獣でも仲間内の食い合いはほとんどしない。人間は平和に共存することを望み、その希望に向かって生きることによって人間になる。獣から人間への回帰は、安全保障が平和を構築できないことを認識して、敵を作らず、互いに仲間であると宣言することである。グローバル化した現代、相互の依存関係にあることは自明である。米国との友好関係を維持しながら、安全保障を捉え直し「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼し」、また「正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し」ている不戦の憲法九条に基づいた平和外交を展開することが真の国際貢献になる。